

発 明 文 化 論

〈第 98 回〉

丸山 亮

異 教 の 受 容

アメリカの次期大統領を選ぶ選挙が近づいているなか、共和党のドナルド・トランプ候補が移民やイスラム教への露骨な反感を示す発言を繰り返している。2015年11月にパリで起こったテロ事件や12月のカリフォルニア銃乱射事件の後、犯人が過激派組織IS（イスラム国）の支持者と伝えられてからは「イスラム教徒の入国禁止」まで言い出した。人権の尊重を高く掲げ、異文化への寛容を示してきたアメリカの大統領を目指す人の発言がこれでは困るというわけで、対立する民主党の候補はもちろん、共和党の身内からも批判の声が上がった。けれども世論調査で共和党のトップを行くのは、トランプ候補らしい。中世以来のキリスト教、イスラム教の対立を念頭に、現在のイスラム過激派との戦いを十字軍のそれに見立てた米大統領もかつていたが、異教の受容は世紀を越える難問であることを思い知らされる。

先日、日本へのキリスト教伝来と関係が深い九州の長崎、平戸と島原を回りながら、各地の遺跡や博物館で当時の様子をしのいだ。

種子島への鉄砲伝来から6年後の1549年、フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸し、キリスト教を伝える。翌1550年、ポルトガル船が平戸に入港。領主の松浦隆信は南蛮貿易を行うようになった。ザビエルもこの地に移って布教に従事し、平戸はその拠点となっていく。松浦氏の重臣が洗礼を受け、領地では集落ごと改宗するなど、キリスト教の受容は順調のように見えた。

織田信長の時代になると、彼がキリスト教の庇護者をもって任じたため、京都や安土には南蛮寺や、聖職者の教育機関セミナリヨが建てられるまでになる。そして大友宗麟や高山右近などが洗礼を受け、キリスト教は北海道の松前にまで広まった。

信長に続く豊臣秀吉は、キリスト教の保護から迫害に転じている。台風で土佐に漂着したスペイン船の船員から「スペインは世界の強国で、宣教師を派遣した先で現地人を改宗させ、占領する」と聞いたのが原因という（カトリック長崎大司教区監修「大浦天主堂物語」）。1597年、フランシスコ会の宣教師24人が捕えられ、長崎で十字架にかけられるという大迫害が続く。

さらに徳川家康も寛容から次第に禁教に傾いていく。その寛容であった時代、長崎は日本の小ローマと称されるほど、教会や、病院まで立ち並んだ。しかし家康は長崎を舞台にしたポルトガル船を巡るいさかきがあったあと、キリスト教を厳禁するに至る。1612年、天領にキリスト教の禁教令を出し、2年後、それを全国に広げて、キリシタンの取締りに入っていった。

キリスト教徒がいなくなったはずの20数年後、徳川家光の時代に、天草四郎を首領とする島原の乱がおこる。信仰を守ろうとする宗教戦争であったほか、島原藩主による重税にあえいでいた領民の一揆という面もあった。幕府側は12万人の大軍でこれを鎮圧。一揆軍が立てこもった島原半島南部の原城跡からは、近年おびただしい数の人骨と、信徒の身に着けていた十字架などが出土している。

これ以後幕府はカトリック色の強いポルトガルとの貿易を断絶し、オランダ商館を平戸から長崎の出島に移す。長崎の教会は壊され、キリシタンを選別する絵踏みも始まった。以来、キリシタンは明治の初めまで隠れて信仰を続けることになる。外国人と関係したことから国外追放になった女性や子供がジャカルタから書き送った望郷の手紙、いわゆるジャガタラ文が、復元された平戸のオランダ商館に展示されていて、哀切をそそる。

西洋文明と不可分の関係にあるキリスト教といかに付き合うかは、日本外交政策上の大問題であった。受容から反発まで、試行錯誤と振幅を繰り返しながら、日本は、在来宗教とのバランスに一定の回答を見出したということだろう。

(まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士)